

# 恋人を愛し なさい！

—性的暴力の深層心理—



東郷 潤

## [筆者注]

●この「アイセ」と言っている存在は、人々の心の中や社会で、愛を命令している様々な存在(教師なり、親なり、深層心理の中で分裂した自我なり、良心／超自我なり、なんらかの権威者なり)のシンボルとして表現したものです。本物の神様とは無関係です。

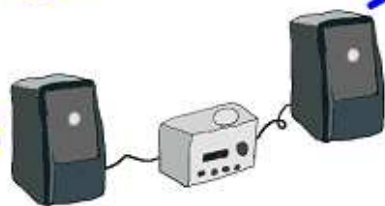
●この絵本は、キリスト教(聖書)の「汝の隣人を愛せ」「汝の敵を愛せ」といった教えに関して描いたものではありません。

あるところに、愛することは善いこと  
で正しいことだと、信じている人がい  
ました。



愛こそ全てさ  
ラララ、Love  
& Peace

愛のためなら、  
死ねるわ！



愛は何よりも大切だ。  
僕も一生、愛に生きるぞ！

その人がある日、恋をしました。

私、あなたなんか、  
好きじゃ  
ないわ



いったい、どうしたというのでしょうか？  
これでは何より大切な愛を育て  
ることは出来ません。それって正しい  
ことじゃないはずですよ。



…もしかすると彼女は、彼の愛を疑っているのでしょうか？ 世の中には、愛していると嘘を付き女性を騙す男が、それはそれは大勢いるのです。



ああ、どうすれば僕がこんなプレイボーイと違うって、本気で彼女を愛しているんだって、彼女に分かってもらえるのだろうか？

自分の愛が本物だと証明するために、  
彼はあらゆる努力をしようと決意しま  
した。

そこで試しに、彼女に愛を命令してみ  
ました。正しいことを命令するのは、正  
しいことのはずです。嘘つきのプレイ  
ボーイなどには決して出来ませんが、  
彼女を本気で愛しているのなら、男ら  
しく堂々と、正義を貫くことが出来る  
はずです。

俺を好きになれ！  
いやよ、だれが  
あんたなんか



なんと彼女は命令を聞きません！  
もしかすると、彼女はまだ彼の本気を  
疑っているのでしょうか？ それとも  
何か悪いものに取り付かれているので  
しょうか？ あるいは極度の恥ずかし  
がり屋さんなのでしょうか？

…でも、大丈夫。障害があればあるほど愛は強く燃えるものです。彼は暗い夜道で彼女を待ち伏せすることとしました。こんなやり方で愛を命令することは、彼にとっても危険なことですが、彼女に分かってもらうためです。「命をかけても惜しくはない！」 —それこそが、本物の愛ではないでしょうか！





ああ、良かった。今度こそ彼がいかに本気で愛しているか、彼女は分かってくれたようです。これで二人はこれから大切な愛を育てて行くことが出来るでしょう。

彼は彼女を、人里はなれた家に連れ込みました。



誰にも邪魔されないところで、二人の大切な愛をゆっくりと育てるためです。

でも時々、彼女は愛を裏切ったのです。



むろん、遠くになんか行けません。



いうまでもなく、愛の裏切りは悪です！ 命がけの、本物の愛を裏切るとは、悪の中の悪です。そして、悪は罰さなければいけません。



**彼女は泣きながら、何度も何度も、愛していると言いました。やはり、本物の愛を深めていくためには、思いっきり怖がらせて命令しなければいけないのですね。**

**…こうして彼は、彼女を脅し傷つけ、暴行を加え続けました。**

殴るのは、お前を  
愛しているからだ。  
お前が愛を  
裏切るから  
悪いんだぞ。



お前を愛している  
から、怒るんだぞ！



ごめんなさい、もう二度と  
裏切らないから

愛してるわ！  
愛してるわ！  
愛してるわ！！



ねえ、君。

この誤解は世界中の人たちがしています。だからあなたも、彼女との愛を育てるために一生懸命努力しているだけと、きっと信じているのでしょうか。

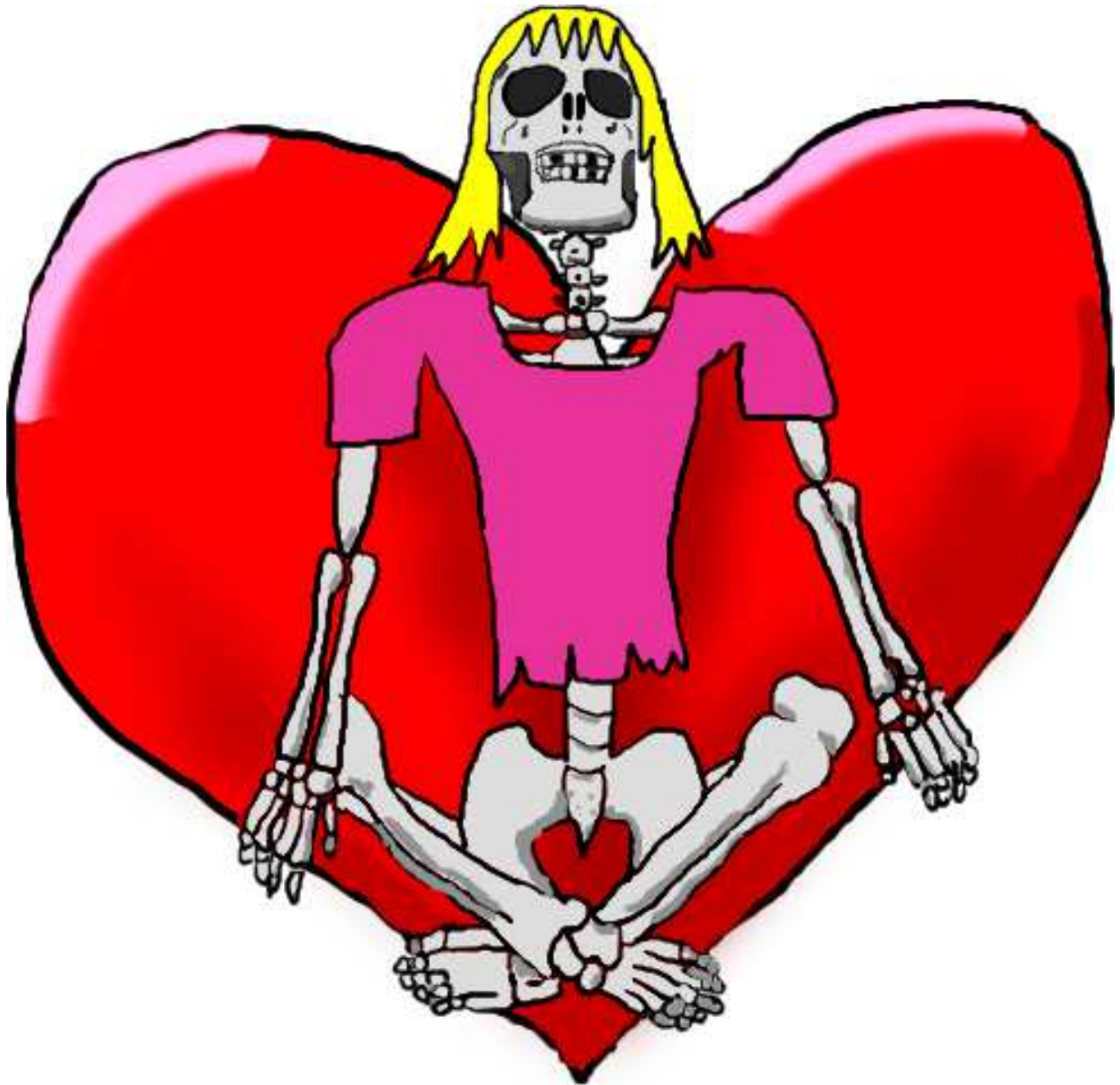
でもね、愛を善悪や罰や命令や暴力で無理に作り出すことなど、人間には出来ません。君が命をかけるほどに、彼女を求めていたとしても、です。



**どうか愛を命令しないで！**

**愛は生まれず、**

**何か別のものが、生まれちゃうから**





## あとがき —絵本「恋人を愛しなさい」

愛を巡っては、大きな誤解／錯覚が存在しています。そして、この誤解は善悪の錯覚とも有機的に結合し、人類の長い歴史の中で様々な悲劇をもたらして来たのです。

もしあなたがこの絵本に共感されたなら、他の方にもご紹介していただければとお願いいたします。

本絵本は、自由にコピーして下さって結構です(商業出版はじめ金銭的な授受を伴う場合を除きます)。また下記WEBからは、東郷潤の他の絵本やメッセージをダウンロードすることが出来ます。

[www.j15.org](http://www.j15.org)

©Jun Togo 2009